



Vol.23 2020.12.15

茂吉記念館だより

(一) 129
1224 まじ 顶きました
0224
校舎にまだ 説話室があつて いけま
せへ。どうも 全力をあこて 下さい。
現在の僕は 実に 大きい 差
因をもつて おやうにして下さい。僕が 一々 校
舎に て おまかせ下さい。 おまかせ下さい。
ヨージで一字一字 差しあがく、やつて下さい。

(三) 288
赤彦君のほの用事が 繰ひあ
て下さる おまかせ下さい。 おまかせ下さい。
校舎は 一人では どうして 駄目
です。一人が見つけたい 説話室 お二の 人
です。一人が見つけたい 説話室 お二の 人
は 寄りに見つける 場合がよくあります。
へと 説話室をさがすやうでは たまらぬ。
ヨージで一字一字 差しあがく、やつて下さい。

森山汀川宛斎藤茂吉書簡(大正15年4月21日)
上から(一)、(三)

- | | | |
|----|--|--|
| 目次 | 寄稿／吉川宏志「死を言葉で生きる
——『死にたまふ母』について」2-3 | ・館長随筆「茂吉に門人はどう酬いでいるか
——佐藤佐太郎の場合——」8-9 |
| | 寄稿／米川千嘉子「斎藤茂吉と岡本かの子」4-5 | ・定例歌会概要・新型コロナウィルス対策 10 |
| | 寄稿／菊澤研一「茂吉雑記」 6-7 | ・収蔵資料から 11
・短信(掲示板)・友の会入会 / 活動支援募金のご案内 12 |

死を言葉で生きる——「死にたまふ母」について——

吉川 宏志

私の歌集『石蓮花』には、母の死を詠んだ一連を収めた。私の実家は宮崎県で、大学時代に京都に住むようになってから、年に数度しか帰省しなかつた。二〇一八年、母は肺臓癌になり、もう手の施しようがなくなり、家で死を迎えることになった。最後の一週間くらい、母とともに時間を過ごしたいと思い、何とか会社を休んで、宮崎の実家に戻ったのだった。九月のよく晴れた日々だった。

お母さん、息をしてよとびたびと頬を打てども
『石蓮花』
息は消えたり

母の最後の瞬間に立ち会えたのは、ある意味では幸福なことだったのかもしれない。親と離れて遠くに住んでいると、葬式にしか行けない、という話をよく聞く。死の直前の母は、幻のような話をすることも多かつた。しかし、母の言葉を最後まで聞くことができたと思うことで、あまり後悔をせずに済んだ。死んだ母を自分の中に残すことができた、という感覚があつたのである。

遺体のなかに母の死は無し母の死はわれのからだ
『石蓮花』
に残りているも

という歌を作ったのだが、伝わりにくいなのかもしれない。

つい自分のことばかり語ってしまった。母の死後に斎藤茂吉の『赤光』の「死にたまふ母」を改めて読んでみた。すると、今までとは違う光を帯びて、歌が見えてきた。「みちのくの母のいのちを一目みん一目みんと

ぞいそぐなりけれ」は有名だが、やや大仰に感じていたのである。しかし実際に、母の危篤の報を聞いて故郷に帰るという体験をしてみると、これ以上に簡潔で確かな表現はないと思うようになった。歌の印象は、読者の人生経験によって、大きく変化するものなのだろう。

*吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の国に
汽車入りにけり*

母の臨終に間に合うかどうか、焦りはあるのだが、目に映る雪山は美しい。山国全体が母の身体のようで、母胎に帰つてゆくような感触がある。

*寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何か言ひたま
ふわれは子なれば*

生きている母に会うことができたが、脳溢血で、言葉はほとんど話せない状態だったらしい。しかし、目で思いを伝え合うことはできた。茂吉はそれが嬉しかつたのだ。

*死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたりとい
ひにけるかな*

こんな歌もある。「目に寄り」という表現が心に残る。母はしやべないので、目だけが感情の通路なのだ。母の目に近づき、「お母さん、おだまきの花が咲きましたよ」と呼びかける。病床に、花を摘んで持つていったのかもしれない。今さら東京の暮らしについて話しても、しかたがなかつただろう。けれども、おだまきの花の美

しさだけは、母と共有できる。故郷の花は、遠く離れていた母と子を結びつける存在なのだ。

茂吉の実家には、父や兄弟たちも居たはずである。

しかし「死にたまふ母」には、そうした人々はほとんどの登場しない。肉親が死ぬとき、「自分が最も愛されていたはずだ」という想いにあることがある（その裏返しで、自分が最も憎まれていたはずだ、という想いを抱く人もいる）。「われは子なれば」という表現には、母が最も愛したのは自分なのだ、という想いも秘められているのではないか。

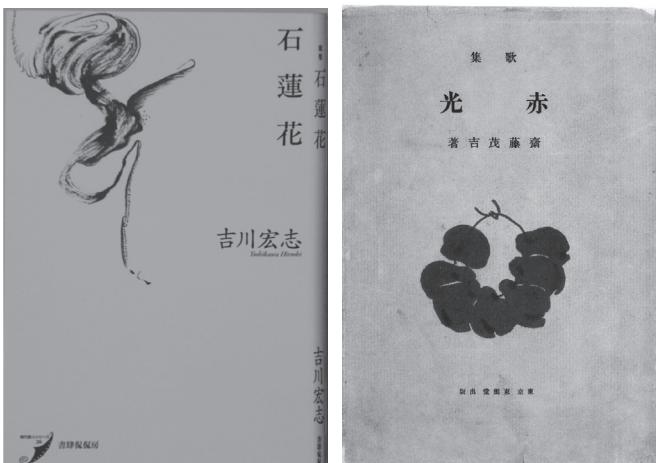
いのちある人あつまりて我が母のいのち死行くを見たり死ゆくを見たり死ゆくを

「いのちある人」に見られながら死んでゆくのは、思えば残酷なことだ。死にゆく人の悲しみや苦しみは、生きている人に全く伝わらないのだから。どうしても越えることができない深い溝がそこに生まれる。

そして、母が死んでゆくのを、ただ見ていることしか



守谷いく(1855-1913)
茂吉の実母、59歳で死去 茂吉は歌集『赤光』に59首の連作「死にたまふ母」を収める 茂吉は守谷家に生まれたが14歳で上京し斎藤家に寄寓する



『石蓮花』(2019 書肆侃侃房)
第31回斎藤茂吉短歌文学賞受賞作品

できない無力感も、茂吉は味わっている。「死行くを」の繰り返しが痛切で、私の母が死んだときも、まさにこんな感じだった、と思いつ出す。そして、「いのちある人」もいつかは「死行く」側になるのだ、ということを感じさせる。

おきな草 口あかく咲く野の道に光ながれて我ら行
きつも

この歌だけを見ると、明るくて可愛いらしさを感じさえする。おきな草の、外側は白っぽい毛に覆われ、内側は赤紫の花を知ると、「口赤く咲く」の描写が、じつに巧いなと思う。そんな明るい風景が、悲しみを抱えているときは、かえって痛々しく、胸に迫つてくる。自分がどんなにつらいときでも、自然は何も変わらずに、

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とはほそはの母は燃えゆきにけり

現代とはだいぶ違うだろうな、と思う歌もある。今は火葬場で、一時間くらいで灰にされるが、当時の茂吉の故郷では、たくさん薪を用いて、野辺で一夜をかけて遺体を焼いたのである。凄い炎と煙だつただろうし、燃えているところを直視していたわけである。肉体の死が、現在よりも壮絶に心に迫ってきたであろうが、みな淡々と受け容れていたのだ。私は目の前で母が燃えるのを見る」とはできるだろうか。たぶん無理だろうと思う。「星のゐる」にも注目したい。たくさんの星が生きているように光り、火を見守っているように感じたのだろう。

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり

落の葉に丁寧に集めし骨くづもみな骨瓶に入れ仕舞ひけり

一首目は、母の骨を拾う、と普通は表現するのを、「母をひろへり」と直接的に詠んだところに表現の妙があり、印象深い。母がこの世に居ないことをまだ認められず、母を探している思いが伝わってくるからだろう。二首目については、茂吉の『作歌四十年』の記述が忘れない。『丁寧に』といふ語は、従来の歌人等によつて殆ど全く使はれなかつた表現なだけに、珍しいといへば珍しく……とあるのである。たしかに、日常生活ではよく使うのに、短歌の中には案外使われない語句はあり、「丁寧」もその一つであろう。そんな語句を使うと、ちょっと不思議な味わいが短歌に生まれる、ことがある。後年の作だと、

欧羅巴の国の動きを雜然と心のうへに置きて昼夜『寒雲』

の「雜然と」の使い方などに共通するものがある。美しい語句だけではなく、平凡な言葉の中にあるおもしろさをとらえる、茂吉の纖細な言語感覚がよく表れている。

驚かされるのは、母の死を泣いている状況の中で、茂吉が歌人としての技巧を手放していない点である。嘆き悲しみつつ、茂吉の中に存在するもう一人の茂吉は、冷静に葬儀の様子を記憶していた。母の骨を拾う茂吉を外側から見つめ、「丁寧に」という言葉を使つとさらに歌の良さが高まる、ことを、判断していたのだ。優れた詩人には、そんな二重性があるのでないだろうか。

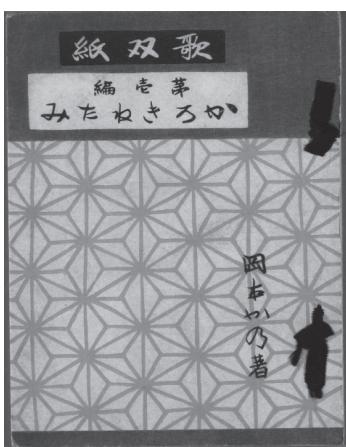
死は、人間にとって理解不能なものが、茂吉は言葉によって、思う存分に歌いあげた。それによって、母の死は、茂吉の中で生きることになった。全力を尽くした茂吉には、母の死を悔やむ気持ちももうなかつただろう。母の死後、温泉につかる茂吉の歌には、ふつきたような、透明な明るさが満ちている。

山かげに雉子が啼きたり山かげの酸っぱき湯アツバキヨウこそかなしかりけれ『赤光』

* 茂吉の歌の引用はすべて初版『赤光』による。

斎藤茂吉と岡本かの子

米川 千嘉子



『からきねたみ』(1912 青鞆社)
早稲田大学図書館蔵

（略）ふわりと流れて来る全体の上に、彼の『ヰタ、ヰミナ』が快いのである。（略）我が國では女流の短歌に感心するものが甚だ少い。万葉の二三の者をのぞいて其他は甚だつまらぬ。和泉式部でも矢張り大したものでは無い。以前晶子女史は中性的態度で歌を詠んだと自告された事があつたが、矢張りわれわれにはさういふ者は有難くない。（略）かるきねたみの歌は芸術品として小さい平凡なものである

とならば、僕も賛成する。しかし又歌を流れて居る或一種のにはひがある。それは堀には意外なものだろうか。茂吉はかの子の第一歌集『かるきねたみ』(大正元)を『アララギ』(大正2・2)で取り上げ、歌集評「かるきねたみ(岡本かの子著)」を書いた。一方、かの子が『赤光』や『あらたま』に傾倒して大きな影響を受けた様子が『浴身』(大正14)以降の歌集に見える。「かるきねたみ(岡本かの子著)」は茂吉の女性の短歌についての見方が率直に出ていて興味深い。

われわれは女性の音声をなつかしいと思ふ。而して彼の清明な音声をば女といふ性から取り離しては聴き得ない。（略）かるきねたみ(岡本かの子著)は茂吉の女性の短歌についての見方が率直に出ていて興味深い。

僕はなるかしいと思ふ。（略）

「ヰタ・フエミナ」はラテン語で、「女性の命、女性の生」の意。これに引き続いで、茂吉は歌集から九首を引いて「アララギ」の女性たちに歌集を薦めた。

前髪も帯の結びも低くしてゆふべの街をしのび来て安兵衛や業平朝臣のにほひではない。其一種のにほひを僕はなるかしいと思ふ。（略）

『浴身』は『かるきねたみ』に早くも詠われていた恋を前に引き続いで、茂吉は歌集から九首を引いて「アララギ」の女性たちに歌集を薦めた。

前髪も帯の結びも低くしてゆふべの街をしのび来て安兵衛や業平朝臣のにほひではない。其一種のにほひを僕はなるかしいと思ふ。（略）

『かるきねたみ』ともすればかるきねたみのきざしくる日かな悲しきものなど縫はむらぐ。

唇をかめばすこしく何物かとらへ得しがと心やはくれなゐの苺の実もてうるほしぬひねもすかたく結びし唇

『かるきねたみ』は夫岡本一平との新婚時代前後を背景とした小歌集だが、じつはそこにはすでに、年下の大学生との恋のことも秘かに挿まれており、茂吉があげた九首のうちの多くがそれにあたると思われる。茂吉はそこに流れれる艶な情感を鋭く見逃さず、その「にほひ」、「ヰタ・フエミナ」を指摘したところになる。

力など望まで弱く美しく生れしまゝの男にてあれ
美しくたのまがたくゆれやすき君をみつめてあ
るおもしろさ

『かるきねたみ』にはこうした、従来の男女関係や恋の詠いかたを刷新した大胆さもあつたが、茂吉にとっては「中性的」で魅力に乏しいものだったに違いない。

かの子が『浴身』の時期以後の作品にあらわな影響を感じさせられるほど茂吉を敬愛したのは、そういう出発期における好感も多少関わったかもしれないが、何より、

出身も生育環境も違う七歳年長の歌人に自分に通う気質を感じていたためであろうことは、両者の歌を見てゆく想像に難くない。

『浴身』は『かるきねたみ』に早くも詠われていた恋を発端として心身の危機に陥つたかの子が、七、八年をかけて再生する過程を反映した歌集である。その後半、すな

わち本格的に立ち直つて意欲が増してきたころ、かの子は雑誌に何度も茂吉のこと書いている。

「あか／＼と一すぢの道とほりたり／たまきはるわが命なりけり(斎藤茂吉氏誄)／かなしく淋しく勇ましい歌が身にせまつて思はれる夕である。」(三月の日記より――)

名流婦人の「ごろ」「婦人俱楽部」大正11・5

かの子は前年刊行の『あらたま』の代表歌を「かなしく淋しく」そして「勇ましい」と言う。当時のかの子は仏教を柱として心身の再生を図つてゐたが、仏教でいう「勇猛心」(猛々しく勇ましい心をもつて進み励むこと)をその孤独ともども茂吉の歌に感じ、それをまさにわが身を励ますいのちの姿としていた節がある。

また、次の文章はかの子が一三九首の大作「桜」に取り組んだところをつづった「日記」の一部である。

「芥川龍之介氏の斎藤茂吉論を読んで氏の頭のよい理解の行きとどいた点に感じた。(略) 芥川氏の挙げられた歌のほか(ほのぼのと諸国修行に出づる)「遠松風も聞くばかりけり/たしかこれも茂吉氏の秀作だつたと覚えて居る。氏が海外からかへられ一日も早く面接の日がまたれる。」(日記 梅花の頃)「婦人画報」大正13・4

かの子は芥川龍之介が自らの鮮烈な『赤光』体験を語つ

た「僻見」の「斎藤茂吉」（「女性改造」大正13・3）を雑誌発売直後に読んでいたことがわかる。龍之介はそこで詩歌に限らず、「あらゆる文芸上の形式美に対する眼をあける手伝ひ」をしてくれた『赤光』への賛辞を惜しまず、オノマトの「新しい息吹」にも注目した。かの子はまさにそれを読んだ興奮の中で「桜」を書いたことがわかつて興味深い。

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわ
が眺めたり『浴身』
しんしんと桜花かこめる夜の家突としてびあの鳴
りいでにけり
しんしんと桜花ふかき奥にいつほんの道とほりたり
われひとり行く
朝ざくら討たば討たれむその時の臍かためけりこの朝のさくら
ほろほろと桜れども玉葱はむつりとしてもの言
はずけり

それがこれらの歌である。現在では巻頭の「桜ばな」の歌が断然有名だが、桜晏茶羅といえそうな多彩な桜の歌々が多く散りばめられたのは、じつはそこから連想されるような自信満々なかの子ではない。むしろ、多量の不安や恐れに支配されるかの子であり、それに抗うように、いかなる場面でも全身、全力を晒して進む決意を何度も自分に確認しているのがかの子だ。そういう中に、茂吉の歌や表現の影響が顔を出す。

ひた走るわが道暗ししんしんと堪へかねたるわが道
くらし
あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命
なりけり
くれなゐの百日紅は咲きぬれど此きやうじんはも
の云はずけり
初版『赤光』
有名歌の引用や本歌取りは一般的にはもとと慎重にな
されるはずであり、茂吉に近い作者であればあるほど抑

制的になるだろう。しかし、茂吉に感激し、普段から茂吉に近い気質を感じていたかの子にとって、わが心をただちに茂吉の表現の上に表してみるとことは自然のことだったようだ。それでいて、同じ「しんしんと」を用いても、あるいは「一本の道」をゆくのでも、茂吉の沈痛さはかの子のものではない。その引用はあくまでもかの子流である。

かの子の「しんしんと」は波立つような桜並木の不安を示すのであり、かの子はそれを打ち消すようにして勇んで孤獨に「一本道」をひた進む意欲を率直に表す。ひた進むわれとは、たとえば、四首目のように敵に向かって全身全力で向かうわれであり、このあたりの全身性もじつに茂吉的ではないか。かの子の最後の歌ももちろん茂吉を思わせる。一連の中では、買物をして疲れたかの子が桜の下で重い玉葱を睨んでいるという場面で独特的のユーモアが漂うが、その根底にあるのもかの子の潜在的な不安ではなかつたか。かつて心身の不調で「狂院」に入院したと語ったかの子の不安が、この場面に茂吉の歌を引き寄せたのかもしれない。「きやうじん」はあくまで茂吉の外側にいるが、かの子にとっては今も内側に潜むかもしれない怖るべき存在だった。

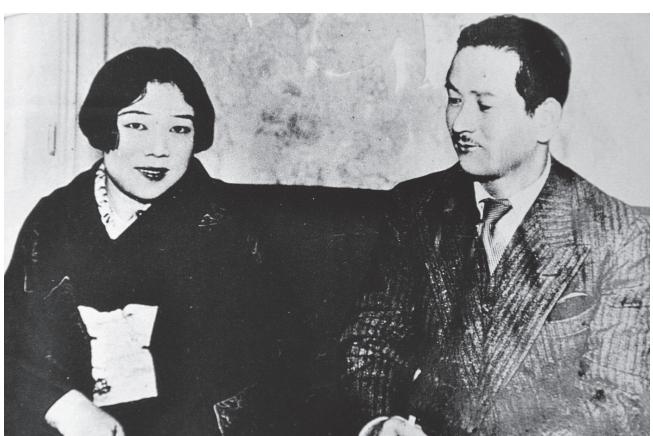
ほかにも、「桜」あるいは「浴身」には茂吉の影響が露に感じられる歌がたくさんあって、あきらかな失敗作も見える。これらの歌を茂吉がどう感じていたか、あるいは門人たちが読んだなら鼻白む思いだつたのではとも想像する。しかし、優れた同時代の文学的な影響を女性歌人が積極的に受けた事そのものが当時においては珍しく、しかも、あくまでも自由気まま、自分の文脈で用いてその世界を拡張したことはさりに未聞のことだ。その結果としてのこれらの歌がかの子畢生の大作「桜」の注目作となつたことは間違いない。こういう影響の受け方は、かの子が茂吉の作品を敬愛しながら、結社とか「道」の考え方とは終生無縁だったことにも関わろう。

かの子が短歌との訣別を宣言して出した『わが最終歌集』（昭和4）には、与謝野晶子、そして茂吉のそれぞれ二首の「序歌」が見える。

このあさけ庭に飛びつつ啼く鳥のたはむれならぬ
ゑぞかなしき
わが友の歌をし読みばしづかなる光のごとくおも
ほゆるかな

かの子は歌の別れを決意したとき、「明星」での歌の出版に立ち会つた与謝野晶子に並んで茂吉をわが歌の恩人として掲げたことになる。二首は『たかはら』（昭和5）に収録された。従来の女性短歌の生真面目さや慎ましさに収まらないかの子の歌は軽口とみなされる（とも少なくなかつたが、茂吉はかの子のどんな歌も「たほれならぬ」切実なものだった）ことを理解してくれていたのではないか。

■よねかわちか 歌人・「かりん」



岡本かの子(1889-1939)と岡本一平(1886-1948)

茂吉雑記

菊澤研一

昭和二十二年春、改造社の現代日本文学全集『現代短歌集』によつて、はじめて斎藤茂吉の短歌を読んだ。敗戦後六・三・三・四の新学制が敷かれ、私は岩手県南の北上山系中の村から盛岡に出て、中学三年に編入された。学校の図書室に改造社の円本が揃つていた。

草づたふ朝の虫よみじかかるわれのいのちを死なし
むなゆめ
ふり灑ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蟬を追ひ
つめにけり
死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に
聞ゆる
虫、蟋蟀、蛙、みなわが村さながらに親しかつた。春夜、
蛙は小川を越えて寝床に聞こえてきた。草箒を持って
笛をとりに行つた。

さかのぼつて昭和二十一年、「農業朝日」創刊号の〈土の文学〉欄で、犬田卯が長塚節の『土』を紹介し、筑波山を背景に麦を踏む女性がいるグラビア頁には節の「早春の歌」が載つた。天長節や明治節の節はタカシと読むのだった。また二十二年「週刊朝日」六月に、佐藤佐太郎の短文「神宮参道の櫻」が中西利雄の絵入りで載つた。佐太郎が歌人とは知らなかつた。雑誌は保存してある。本屋のない村に新聞屋が文化を配達していたのである。

学校の寄宿舎に「アララギ」があつた。舎監の長瀬義本が、「斎藤茂吉を知つてゐるか」といつた。京都の高柳得寶と長瀬（旧姓高柳）は兄弟で茂吉門である。

弟が歌を中断しているので、兄が会費を払つて雑誌が届くようにしてゐるのだった。二人は秋田県六郷町、淨土真宗真乗寺に生まれた。

海の上に離れて男鹿の山の見ゆ得宝和尚飯くふごろか

鉢の子を持ちて歩きしいとけなき高柳得宝われは思はむ
義本が仙台で勉強していたとき、疎開中の茂吉を訪ねた。歌を所望するのに用意がない。大学ノートをぱりぱり破つて差し出した。

昭和二十年九月一日金瓶村にて高柳義本安達正道二君と相見る

睡蓮の花咲く池をまへにして二人の友をわれはうれしむ
短歌拾遺（昭和二十年）

二十四年十月、高校二年になつて「アララギ」に入会した。文明幕府下で童馬山房選歌はない。茂吉選歌は二十三年からはじつた「朝日歌壇」だけだつた。当時、朝日新聞は四頁建。歌壇・俳壇（高浜虚子選）は隔週掲載すなわち月二回で、入選は七首（句）のみ、評は原則一行。難関中の難関である。

茂吉が選をした岩手日報二十六年の新年詠でさえ、九千七百首集まるという時代だから、朝日の盛況は無理もない。清水房雄、池上浩山人、松井芭人、山本成雄なども投稿していた。闇雲にはがきを出した。二十五年九月十日ようやく入選した。

菊澤研一

歓天喜地。これが私の出発で短歌開眼である。この日を記念して生涯忘れない。茂吉全集にも収録されている。朝日に八首入選し二十六年十一月に「巧者に過ぎて真実味に乏しきうらみあり」という評もあるが、全集には載らない。代選だったと思う。

二十六年から岩波書店の月刊「図書」「文庫」（のち「図書」に併合）を購読した。「図書」に匿名でよく茂吉に関する文が載つた。三十年文藝春秋新社刊『遠いあし音』に収録される小林勇の執筆である。三十一年第四回日本エッセイスト・クラブ賞を得た名著で、茂吉研究に必見の著作だが絶版。岩波文庫で復刊してくれないものか。

「図書」二十七年四月号は、五月から刊行される斎藤茂吉全集を予告する「茂吉特集号」に全頁をあてた。巻頭に小泉信三の「歌壇の偉観」。全集の内容見本にも転載された。圧縮された名文だからこそ引用したいが無理だ。小泉に執筆依頼したのは童馬会員で全集編集者三人のうちのひとり佐太郎であろう。岩波書店員時代、鷗外全集の編集にひとりで苦労している佐太郎を小泉は知つていた。担当者を増員させ佐太郎に加勢しようと小泉は岩波茂雄に書簡を送つたが、思惑は外れた。岩波宛の書簡が『岩波茂雄への手紙』（岩波書店刊）に収められている。この本の題簽は茂吉の毛筆である。茂吉宛書簡がまとめられたらどんなに有益であろう。散逸してしまつて詮ないことだ。

経済学者・慶應義塾大学塾長小泉信三^{*}が茂吉を賞揚し、安倍能成が、「ある人が中山伊知郎に後世にのいる者は誰かと聞いたら、それは斎藤茂吉だと立ちどこに言つた」というように、茂吉に関心する人は数知れない。中山は経済学者・中労委委員長・一橋大学学長だった。全集の月報の執筆者を見たら層の厚さが知られる。今ではほとんど故人である。

東山魁夷と盛岡で話したとき、出世作となつた「道」を描くとき茂吉の一本の道の歌を心にもつていて、といつて、暉峻淑子は岩波新書の三冊のひとつに佐太郎の『茂吉秀歌』を挙げている。医学生だった加藤周一是、茂吉と同期の父の紹介状をたずさえて青山に茂吉を訪問した。山田風太郎も『赤光』を読み、『人間臨終図巻』に茂吉を書いた。

吉行淳之介が、「Münchenにわが居りしどき夜ふけて陰の白毛^{ほのしらげ}を切りて棄てにき」の白毛は相方のだろう、との珍説を呈したのはいかにも作家らしくて面白い。阿川弘之、遠藤周作、辻邦生、三島由紀夫、佐藤愛子、田畠麦彦、日沼倫太郎、などいなど、埴谷雄高、河上徹太郎（茂吉の死の前後を描いた北杜夫の「死」を酷評）、村松剛、奥野健男、篠田一士等々、茂吉を首肯しつつ北杜夫と交流したとみていい。『楡家の人びと』が媒体にもなっている。

茂吉全集は一九七五年五月から刊行された。私は同年八月「歩道」に入会し、佐藤佐太郎に師事した。第一回配本全集（旧版）第一巻「歌集二」（赤光・あらたま・つゆじもの）の編集が佐太郎であった。本が届いたときのわななくような感動を忘れない。ワイン・レッド

の布袋の表紙、茂吉筆の金の題簽、ずしりとした重さ、きつかりした大化堂（後に精興社）の活字、何もかも嬉しかった。私の給料に比して高価だったことも。そのころ我が家は建てかえ中で、棟梁の賃金三百円、弟子は百円だった。

月一冊の配本を読み切るのは苦心した。誤字や誤植に気づいて岩波に通信すると、柴生田稔から札状が届いた。

第二回配本全集（旧版）第八巻「隨筆二 滯歐隨筆」この息もつかず流れてゐる大河は、どのへんから出て来てゐるだらうかと思つたことがある。維也納^{ヴィ也納}生れの碧眼の処女とふたりで旅をして、ふたりして此の大河の流を見てゐた時である。

「ドナウ源流行」はいかに展開していくのか。碧眼の処女とは？ 読者の少年には魅惑的だった。「探卵患」「ゲゾイゼ谿谷」の女性と同じかどうか。興味はともあれ迫つてくる重量とひびきがあつた。

歌会詠草〔歌会〕
はるばると Wien 三界にたどり来て交合らしき交合をせず
少年には刺激的なこの歌は、ワインの留学生の歌会で二等賞になり、「維也納製の萬年筆を褒美に貰つた」と隨筆「歌会」に書いている。全集（新版）第三十三巻の前田茂三郎宛書簡（一〇四五、大正十一年三月五日）では、「安全ひげそりもひ申候」とある。

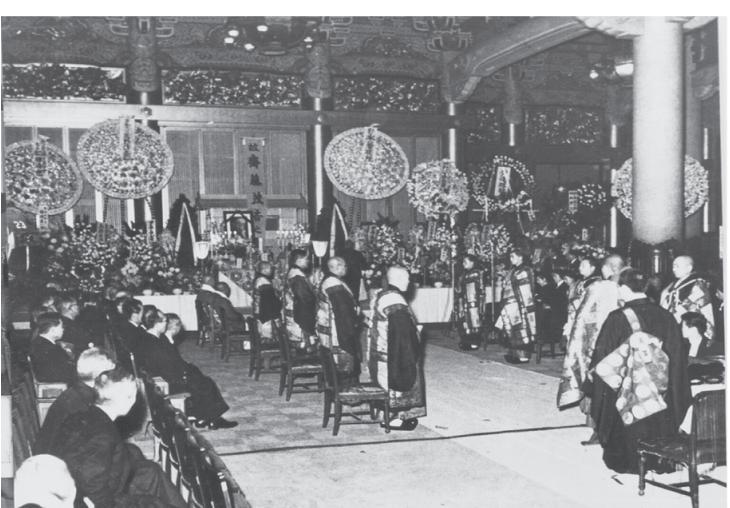
青木正美『肉筆で読む作家の手紙』（本の雑誌社刊）「斎藤茂吉異聞」には、「」のエピソードは後年現れるほとんどの茂吉伝に使用されるが、これは茂三郎が持ち帰つた一通だったのである」と書いている。しかし滯歐

随筆が書簡集より先に刊行されているから、巷間に流布したのは茂吉の文「歌会」によるだろう。

一九二八年三月二日の葬儀に列し、『赤光』『朝の虫』『歩道』各初版を神田で入手し、葬儀の翌日、佐太郎を訪問した」と、上ノ山の山城屋を訪ねて高橋四郎兵衛・重男父子に会つたこと、金瓶展墓、青山展墓、藏王山上歌碑を見たこと、大石田の二藤部家、板垣家を訪ねたことなど書くつもりが、もはや紙数が尽きた。

* 小泉信三『師・友・書籍』私の評論集（1933.6）、『學窓雜記』（1936.7）『大學生活』（1939.12）、『師・友・書籍 第2輯』（1942.10）はいずれも岩波書店刊行で、製作担当は佐藤佐太郎

■ きへんわけんじら・歌人・「歩道」



篠地本願寺における斎藤茂吉の葬儀 昭和28年3月2日

* 「宝」「寶」の表記は、地の文では「寶」、短歌作品では「宝」とした。
* 『斎藤茂吉全集』の新旧の表記については「全集（旧版）」、「全集（新版）」とし、注記がない場合は原則新版の全集から引用した。

茂吉に門人はどう酬いているか——佐藤佐太郎の場合——

今年の三月私は『茂吉からの手紙』(ながらみ書房)というささやかな茂吉論を刊行した。斎藤茂吉記念館のリニューアルオープンに共鳴して執筆したもので、若いころの茂吉が若い後進歌人に書き送った手紙から、茂吉の篤い短歌指導や生活助言がどんなものであったか。ある時は医師として病気の相談にもあたっているが、その実際がどういうものか手紙から明らかにしたものである。永井ふさ子、結城哀草果、杉浦翠子、山口茂吉、原阿佐緒、佐藤佐太郎、河野多麻、次男斎藤宗吉(北杜夫)を取り上げている。

斎藤茂吉の手紙は一万通近く公になつてゐるが、若い歌人、初心者に實に懇ろに、熱っぽく、具体的に、助言を惜しまない。多くが大成していることも、茂吉の眞の門人愛として改めて評価されることでもあらうか。しかば、門人は茂吉にどう酬いでいるだらうか。一家をなし茂吉否定に進んだ歌人もいるが、多くが生涯にわたつて、その恩恵に感謝しさまざまな形で茂吉を評価している。中でも佐藤佐太郎は短歌結社「歩道」の運営に当たつて斎藤茂吉の業績を踏襲し、進展させ、茂吉の歌・歌論のわかる門人の育成に当つた。その潔いまでの尊敬ぶりを随聞著二冊から選出し書いておくことにする。

佐藤佐太郎は十六歳の時茨城県平潟より上京、岩波書店に入社し翌年十七歳にて「アララギ」に入会、作歌を始める。昭和二年三月には、斎藤茂吉にまみ

え以後面会日には必ず茂吉の添削を受けた。佐太郎は十一月十三日生まれだから、十七歳の少年にして茂吉門の作歌者となつたことになる。入門から五か月後の昭和二年八月には茂吉から毛筆の葉書をもらつてゐる。「少々気が利過ぎてゐる○細かすぎる○しかし、歌つくりもいろいろの處を通過するゆゑ、氣長にやり玉へ。○觀方、もつと本物を觀玉」というもので、少年佐太郎の才能を茂吉は鋭く見抜いた助言であつた。茂吉の聲咳に接し得る機会の多くなつた佐太郎は、茂吉の談話の意義を若い感性で感じ、昭和五年二月二十六日から茂吉の隨聞記録をはじめ、昭和十六年十二月二十五日まで十一年間分が『童馬山房隨聞』(昭和五十一年岩波書店刊)である。佐太郎は岩波書店の編集者でもあるから、茂吉の書斎「童馬山房」への出入りが多くなり、この書名となつたのである。それ以後、戦時下、疎開、敗戦、戦後貧困生活、茂吉の老を見守つたのが『斎藤茂吉言行』(昭和四十八年角川書店刊)で、昭和十七年一月七日から、昭和二十六年一月二十九日までの斎藤茂吉隨聞である。晩年の茂吉が健康を害し、頭脳の衰えた昭和二十七年以後佐太郎は慎んで記録していく。こうして斎藤茂吉が最も輝いた四十歳代後半から、ぎりぎりの晩年までの短歌への貴重な思い、振る舞いを今われわれは読み知ることができるのである。

一、二十二歳佐太郎が書き留めた茂吉の作歌真

—『童馬山房隨聞』より

『童馬山房隨聞』にはこんな記述がある。昭和六年の四月十日の記事、「君は(山口茂吉・註 秋葉)話の方がおもしろいが、古泉(千権)がそつた。古泉の話をきいてるとともおもしろい。鷺の歌をつくるときなんか、鷺がたくさん寄つてぎやあぎやあさわいでいる。それでいて変に寂しいんだね。その話を聞いて僕らはうらやましくてしようがなかつた。なんぶんも巣鴨の方(小石川の伊達家の庭)へ通つて、古泉は苦心して、出来た歌は「鷺の群かずかぎりなき鷺のむれ騒然として寂しきものを」(「川のほとり」というんだから。これではだめだよ。それに相違ないが芸術は二二ーんが四ではおもしろくない。もう少し濁らなくては。古泉のものにはそういうものたりないところがあつた」と言われた。茂吉は四十九歳、記録した佐太郎は二十二歳である。作歌が「二二ーんが四」では面白くなく、もつと濁る必要があるという歌論・作歌真は、更にリアリティに徹し生命感あふれるものであれ、ということで今日及び将来の歌壇にとつても必要な示唆でもある。佐太郎の記録は歌人茂吉のぐく日常にかがやいている、いわば後光のようなものさえ書き残し、茂

吉の存在を高めているのである。こういう例は数限りなく、茂吉の恩恵に酬いでいることではあるまいか。

二、戦時疎開下ある日の茂吉

—『斎藤茂吉言行』より

茂吉随聞『斎藤茂吉言行』にも印象深い記録がたくさん残されている。戦時下の昭和二十年、茂吉は四月十日にすでに郷里山形県金瓶に疎開していたが、五月二十五日の東京大空襲により、茂吉の青山の自宅も病院も焼失、数日後に夫人と次女も茂吉の下に逃れて来た。佐太郎も同様に焼け出され、岩波書店を退職し、すでに家族を疎開させてあつた茨城県千鶴町の実家に帰つた。戦況は深刻化し、日本の都市の多くが米軍空爆下に置かれた。そんな昭和二十年八月一日の記事には、「本土決戦」ということがいわれるようになつて」とあり、佐太郎自身の運命もおぼつかない、生き続けることができないかも知れない状況であつた。「もう一度先生に会つておこうとおもつ」て、茨城から、二日をかけて鮎などを土産に、疎開中の茂吉を訪ねている。この日の茂吉日記には佐太郎から恵与品として「広瀬川上流ノ鮎八尾、鶏卵八個、百合ノ根、若布、胡瓜三本、歯ブラシ一本、弁当持参」とあるから、疎開中の師を見舞う思いが強くあつたことが解る。

〔斎藤十右衛門家は先生の生家の上隣である。土間をはいつた框のところで輝子夫人と昌子さんが馬

鈴薯をむいていた。白衣に前掛けをした先生が出て来られて、母屋のわきを通つて奥の土蔵に案内された。その蔵敷が先生の住居になつてゐる。座敷の外の縁に座布団をおいて坐る。縁には茶箱なども置いてあつた。山城屋からわけでもらつたという葡萄酒のこつたのを持つて来てコップにつぎ、ここは昔から井戸のいいのがあるといつて、つめたい方がいいだろうと水をそそいだ。先生はやや日焼けされた顔容で元気そうに見えた。『蔵敷を提供してもらつて』が、閉め切つているところで暑くてね。鼠がはいるもんだから開けはなしにしておくわけにもいかないしね』。上山金瓶疎開中の敗戦前の茂吉家族生活が断片ながら、このように書き残され、これだけでも意義があり、戦時下の師弟の四ヶ月ぶりの邂逅はお互に生きる勇気を抱くことになつたのではないか。昼食後茂吉と佐太郎は上山の「山城屋」を目指して徒歩で向かう。途中、今の斎藤茂吉記念館のある明治天皇の行在所にてゆっくり休む。藏王が松の間から見える。茂吉は佐太郎に語つてゐる。「こんどの戦争はもう大勝利というわけにはいかないことがたしかになつたから、どうかして有利に局をむすぶということになるんだが、まけたら属国だからね」。佐太郎に歌ができるか聞き「歌は進むときは作らなくても進むからいいんだ」という。更に「半郷に観音さまがつて、あそここの境内にいつてると気持ちがおちつていいね。村の山はやはり人に会つたりしていけない」等々の話をしている。この半郷、現在の山形市藏王半郷地区、の觀音様には茂吉歌碑がこのほど新しくたつた。山城屋に着き夕食が始まつたころに平福一郎

氏（百穂長男）が着き四人で酒を飲みながら話している。岡麓先生から書家の中林梧竹八十七歳の書をもらったこと。「歌集ならどんな歌集でもまずこれならいい」という歌が何首かあるもんだが、書は書き直すことができないからむずかしい。画よりむずかしいななどと話している。茂吉日記に「佐藤君ハ五時発三テ仙山線三テ帰ツタ筈デアル。○友アリ遠方ヨリ來リ、ウレシイガ別ハツライ」とある。

■秋葉 四郎（あきば しろう）館長・歌人



第1回童馬会（斎藤茂吉全集編集刊行会）の折 昭和27年3月11日 神田末はつにて
前列左から結城袁草果・茂吉・輝子・中列左から佐藤佐太郎・山口茂吉・柴生田稔・土屋文明、
後列左から斎藤茂太・小林勇・布川角左衛門

定例歌会 第17・18回

令和二年度講座事業として定例歌会（第十七回）六月二十八日、第十八回（十一月十五日）を、歌歴や居住地を限定しない歌会として計画した。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、六月に開催予定だった第十七回は開催を取りやめ、十一月に予定していた第十八回は紙上歌会として開催した。以下各回詳細。

■第17回（開催中止）

当初は六月二十八日に予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催を中止した。以下中止の通知。

- 後援団体に対する開催中止の通知（五月二十九日）
- 一般参加者等に対する開催中止の通知（六月一日）

■第18回（紙上歌会）

十一月に開催予定だった第十八回は、歌歴や居住地を限定せず、一堂に会する集会的な歌会を取りやめて、紙上歌会として時期を八月下旬から十月中旬にかけて前倒ししたうえで開催した。以下事業の実施詳細。

- 紙上歌会の作品募集（八月二十四日～九月十一日）
- 選歌と歌評のため歌会作品集（全投稿歌を無記名一覧化）を参加者に郵送（九月十五日）
- 参加者は選歌と「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評を執筆し記念館に返送（十月一日）
- 氏名入り作品一覧、選歌集計結果と各参加者の「最

も印象に残った歌（一首）」に対する歌評、講師（秋葉四郎）の全歌評を掲載した「第十八回定例歌会【紙上歌会】作品集」を発行（十月十三日）
□ 「第十八回定例歌会【紙上歌会】作品集」を参加者に郵送（十月十六日）
以下高得点作品と講師選作品を紹介。（敬称略）

□ 「第十八回定例歌会【紙上歌会】作品集」を参加者に郵送（十月十六日）

以下高得点作品と講師選作品を紹介。（敬称略）

（十月十六日）

以下高得点作品と講師選作品を紹介。（敬称略）

も印象に残った歌（一首）に対する歌評、講師（秋葉四郎）の全歌評を掲載した「第十八回定例歌会【紙上歌会】作品集」を発行（十月十三日）
□ 入館受付に飛沫対策のビニールカーテンの設置
□ 入館料と物販の金銭授受はトレイ上で行う
□ 入館希望者に対する非接触体温計での検温を実施（三十七度以上の場合は、入館をご遠慮いただく）
□ マスク着用と手のひら消毒の協力依頼（消毒用アルコール等を設置し、マスク不所持の場合は必要数を提供）
□ 入館者に対する氏名・住所等を含む連絡票の提出協力依頼（感染者発覚後の通知利用を目的とし、一定期間保存の後に破棄）
□ 映像展示室内の座席四十席を、半数の二十席に削減
□ 受付、館内ベンチ、キッズサロン、集会室内等にソーシャルディスタンスの掲示
□ 集会室内設置「茂吉ライブラリー」検索用パソコン二台のうち一台を使用停止
□ ドアノブ、連絡票記入台、記入用鉛筆等の適宜消毒作業実施

新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響について

■新型コロナウイルス感染拡大により生じた臨時休館と行事の中止等

- 臨時休館（四月三日～五月三十一日 五十九日間）※四月は四月二一日のみ開館
- 第四十六回斎藤茂吉記念全国大会の中止（当初開催予定日 五月十七日）
- 定例歌会 中止（第十七回）と事業内容変更にて開催（第十八回）※詳細上記



感染拡大防止協力の表示

収蔵資料から

今年度、歌人・文人・知人などからの森山汀川宛の書簡一八八三点が汀川の孫である宮坂丹保氏の厚意で当館に寄贈された。その汀川宛書簡の内、斎藤茂吉からの書簡は三〇〇点で最も多く、そのほとんどが『斎藤茂吉全集』に収載されていない、いわゆる未発表書簡であった。そのほかには、島木赤彦、土屋文明、岡麓等のアララギ派歌友の書簡や、歌人以外の書簡も多数で、汀川の交友の広さが伺える。

本稿では森山汀川の紹介と共に、汀川宛斎藤茂吉書簡の中でも特に数が多く、重要と思われる『長塚節全集』の編纂に関する書簡について報告したい。

森山汀川は明治十三年、長野県諏訪郡落合村（現・富士見町）生まれ、本名は森山藤一。明治三十三年に島木赤彦と出会い、後に師事した。明治三十六年、同郷の歌人・俳人らと第一次「比牟呂」を創刊し、「アララギ」と合同した後は斎藤茂吉、土屋文明、岡麓らと交流して作品を発表、昭和四年には「アララギ」選者となる。昭和二十一年に第二次「比牟呂」を創刊するも、同年六十七歳で病没した。

茂吉が汀川と初めて顔を合わせたのは大正二年で、以降、年に数回書簡のやり取りがある程度の間柄であった。だが、その書簡を交わす回数が増えたのは大正十五年前後であり、その理由は赤彦が主導して行う予定であった『長塚節全集』の編纂と発行を、赤彦没後に茂吉が引き継いだことによると考えられる。赤彦主導のもとで行われていた全集編纂において、汀川は長塚節「病牀日記」、同「耕作手帖」等の筆写に

携わっており、赤彦他界に伴い茂吉がそれを主導するようになってからも、引き続き汀川は全集の編纂にあつていた。

茂吉と汀川の作業連絡は主に書簡で行われ、校正作業では、茂吉がその指示を書簡で送り、汀川は校正した原稿を茂吉に送る、送られてきた原稿を茂吉が確認する、というように作業を進めていた。しかし、長塚節自身による書き誤りや誤植、筆写した際に生じた書き間違いなどが多々あり、校正作業は難航する。本誌表紙に掲載の一通のハガキは、ともに大正十五年四月二十一日に茂吉が汀川に送ったものだが、それぞれ「現在の僕は実に多忙ですから大体の指図だけですむやうにして下さい。僕が一々校正して誤植をさがすやうではたまらぬ。『ヨーリ』で一字一字差しながら、やつて下さい。」「筆記やなんぞは大兄一人では到底だめだから、最後他の人を手伝はせて下さい。」と校正作業の進め方が記されている。後者の文章は、右上に

〔三〕と記された六

ガキの黒字本文の行間に、追伸の役割を果たすかのように赤字で書き込まれており、茂吉の念押しする意図を汲み取ることが可能である。

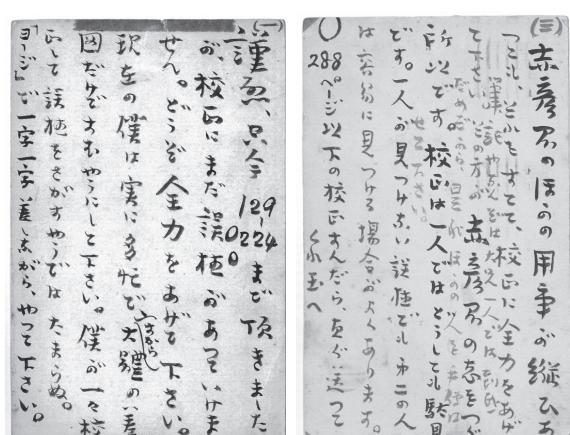


第6回安芸会の折 昭和5年8月7日 高野山にて
左から森山汀川、斎藤茂吉、1人おいて右下中村憲吉

〔三〕と記された六ガキの黒字本文の行間に、追伸の役割を果たすかのように赤字で書き込まれており、茂吉の念押しする意図を汲み取ることが可能である。

茂吉は「『ヨーリ』で一字一字差しながら、やつて下さい。」「筆記やなんぞは大兄一人では到底だめだから、最後他の人を手伝はせて下さい。」と校正作業の進め方が記されている。後者の文章は、右上に〔三〕と記された六ガキの黒字本文の行間に、追伸の役割を果たすかのように赤字で書き込まれており、茂吉の念押しする意図を汲み取ることが可能である。

（文責：佐藤結子）



森山汀川宛斎藤茂吉書簡（大正15年4月21日）左から（一）、（三）なお（二）は欠

短信（掲示板）

◆講座事業

◇定例歌会（第17、18回）

記念館の周知・誘客と短歌の普及と実作の向上、さらに歌壇の発展等を目的とした超結社の歌会形式で、継続事業として二回計画／第十七回／新型コロナウイルスの影響により開催中止／第十八回／新型コロナウイルスの影響により紙上歌会として令和二年八月二十四日から十月十六日にかけて開催し、歌評集を発行・投稿歌数五十首 ※詳細は本紙十ページに掲載

◆特別展・企画展示

◇特別展「収蔵資料展—茂吉が親しき人に贈つた品々」

斎藤茂吉が多くの方々に贈られた品々を紹介する企画展です。茂吉の生涯における幅広い交友関係を、その人と作品を紹介しながら、常設展示室内資料を補足するものとして展示／会期＝令和三年三月下旬まで

ふるさと納税

上山市ふるさと納税制度のご活用による控除が受けられます。また、斎藤茂吉記念館提供によるオリジナルグッズの返礼品があります。

上山市ふるさと納税

検索

「友の会」ご入会・「活動支援募金」のご案内

●友の会

友の会会費は、当財団が実施する公益目的事業全般の充実等に活用します。

- ◎賛助・維持会員（対象：個人・法人・団体）
年会費1口10,000円（会員証で10名まで無料入館）
 - ◎一般会員（対象：個人）
○藏王会員 年会費一口5,000円（会員証で5名まで無料入館）
 - 最上川会員 年会費一口3,000円（会員証で3名まで無料入館）
 - 学生会員 年会費一口1,000円（会員証で本人のみ無料入館）
- ※友の会は入会日より1年間有効です。

●活動支援募金

活動支援募金に対する寄付金は資料の修復、複製資料の製作や記念館の設備更新等費用の一部として活用します。

- 法人・団体等 一口10,000円
○個人 一口5,000円

※「友の会・活動支援募金」とも、何口でも結構です。
※ご入会・ご寄付ご希望の方は当館までお問い合わせください。

◆編集後記
本紙二十三号のため、吉川宏志・米川千嘉子・菊澤研一の三氏より玉稿を頂戴しました。諸氏のご協力に厚く御礼申し上げます。本年度は、世紀的な新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、四月から二ヶ月間の臨時休館を余儀なくされました。行事の開催中止や縮小、感染症対策の実施なども加わり、厳しい運営状況が続いております。一方で茂吉研究の向上につながる非常に重要な資料と作品の寄贈・寄託がありました。これは茂吉の遺族・親族をはじめとする関係各位のご厚意によるもので、大変有難く存じます。

- ◆利用案内
○開館時間 9:00～17:00(入館受付 16:45まで)
○休館日 每週水曜日(祝日・休日の場合は翌日)
7月第2週の7日間・12月28日～翌年1月3日
- ◆入館料
一般：大人600円・学生300円・小人100円
団体：大人500円・学生250円・小人50円
※学生：高・大学生 小人：小・中学生
※団体10名様以上 ※障がい者割引(団体料金適用)
- ◆音声ガイド 300円

◆交通案内

- ◆お車でお越しの方(※無料駐車場有：普通車70台／大型車5台)
・東北中央自動車道かみのやま温泉I.C.から市内方面20分
- ◆電車でお越しの方
・JR奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー10分
・JR奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩3分

◆広報・周知活動

◇斎藤茂吉記念館の紹介動画について

動画配信サイトYouTubeに開設されている上山市公式チャンネル「ござつてえTV」にて投稿・公開されている、斎藤茂吉記念館の紹介動画「斎藤茂吉記念館 / Saito Mokichi Memorial Museum」（制作or.jp）にて、掲載開始



紹介動画冒頭のドローンによる斎藤茂吉記念館の空撮

◆斎藤茂吉記念館評議員会任期満了に伴う役員選任

公益財団法人斎藤茂吉記念館の評議員会が六月二十六日、上山市役所で開かれ、任期満了に伴う役員選任を行った。

評議員の選任では、山口博子氏が退任し、松本佳子氏を新任。横戸長兵衛、大沢芳朋、古山茂満、大瀧保、佐竹瑞夫、後藤恒裕の六氏を重任した。

理事は木村福治氏が退任し、平井康博、五十嵐庄七、土屋講の三氏を新任。清野伸昭、晋道純一、佐藤信幸、木村義博の四氏を重任した。監事は川合賢助、井上真一の二氏を重任した。評議員、監事の任期は四年、理事は二年。

理事会で清野伸昭代表理事と木村義博業務執行理事を再任し、晋道純一資金運用執行責任者を新任した。